

JADS

JAPAN ART DOCUMENTATION SOCIETY

アート・ドキュメンテーション学会

JADS

アート・ドキュメンテーション学会

第14回 秋季研究集会 予稿集

2021年10月23日(土) 13:30~17:30

オンライン開催

アート・ドキュメンテーション学会 第14回秋季研究集会プログラム／目次

2021年10月23日(土) 13:30 - 17:30

13:30 開会挨拶 本間 友 (アート・ドキュメンテーション学会幹事長)

【第15回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同推進賞 授賞式】 13:40 -14:10 p.4

14:10-14:20 休憩

【秋季研究集会・研究発表】 14:20 -15:20 (発表25分 質疑5分)

14:20-14:50 [発表1] 小林仁(大阪市立東洋陶磁美術館) p.7
「大阪市立東洋陶磁美術館収蔵品画像オープンデータサイト」の公開
——デジタル画像のオープンデータ化の意義と今後の展望

14:50-15:20 [発表2] 永崎研宣(一般財団法人人文情報学研究所) p.9
津田徹英(青山学院大学)
下田正弘(東京大学)
画像アノテーションを活用した図像データベースの構築

15:20-15:30 休憩

【秋季研究集会・萌芽研究発表】 15:30 -17:30 (発表10分 コメント5分 質疑5分)

15:30-15:50 [発表3] 大坪逸貴(サイフォン合同会社) p.12
ミュージアムのオンライン活動を考える —ギャラリートークの配信

15:50-16:10 [発表4] 武澤里映(大阪大学文学研究科) p.13
五十里翔吾(大阪大学基礎工学研究科)
伊藤謙(大阪大学総合学術博物館)
バーチャル展覧会作成ソフトウェア Virtualion の特徴と可能性
——2020年度の実践事例を通じて

16:10-16:30 [発表5] 田村賢哉(東京大学大学院学際情報学府) p.14
最新 Web 技術による汎用 WebGIS の開発とオープンソース

16:30-16:50 [発表6] 平野理紗子(立命館大学大学院文学研究科) p.15
ステンドグラス・アーカイブの構築と課題

16:50－17:10	[発表7] 朝倉芽生(高知県立美術館) 高知県立美術館 石元泰博フォトセンターの実践と展望・課題 ——写真プリントの管理について	p.16
17:10－17:30	[発表8] 石本華江(慶應義塾大学アート・センター) 「ダンスの記述」を記録する——土方巽アーカイヴの事例を元に	p.17
17:30	閉会の挨拶 赤間 亮(アート・ドキュメンテーション学会 会長)	
第16回 野上紘子記念	アート・ドキュメンテーション学会賞、同推進賞 推薦のお願い	p.20
	アート・ドキュメンテーション学会 刊行物ご案内	p.23
	アート・ドキュメンテーション学会 入会のご案内	p.24

Twitter ハッシュタグ #JADS2021autumn

第 15 回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同推進賞授賞式

2021 年 10 月 23 日

第 15 回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・推進賞選考委員会

標記の賞は、毎年会員の皆さまによりご推薦いただいた候補のなかから選考を行っています。2021 年度は下記の通り、本年 6 月に開催した年次大会内において学会賞 1 件、推進賞 1 件の授賞を発表しました。この度、その栄誉を称えるため本秋季研究集会で授賞式をオンラインで執り行います。今後とも本賞の発展にご協力くださいますよう、お願いいたします。

第 15 回 野上賞選考委員会

高橋晴子（委員長）、赤間亮、古賀崇、田良島哲、前田富士男、水谷長志

◆第 15 回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞

〔賞の概要〕

『アート・ドキュメンテーション研究』、『アート・ドキュメンテーション通信』、その他の雑誌に掲載の論文・記事、図書、データベース、展覧会、ウェブサイトのなかから優れたものを選出。会員に限らない。対象となる論文・記事、図書、展覧会は、受賞年の前年度を含む過去 3 年間に発表されたものとする。

受賞	國盛 麻衣佳 氏 『炭鉱と美術：旧産炭地における美術活動の変遷』（九州大学出版会、2020）の刊行に対して
授賞理由	國盛氏は、九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻にて博士（芸術工学）を授与された博士論文をもとに、著書『炭鉱と美術：旧産炭地における美術活動の変遷』を 2020 年に刊行した。本書は國盛氏自身のルーツである福岡県三池地区をはじめ、北海道、福島県常磐地区など、旧産炭地での「炭鉱に由来する文化活動・文化政策」の歴史を、資料や当事者らへの聞き取りをもとに跡づけつつ、労働問題、重大事故、閉山後の社会の衰退といった「負の歴史」をあわせもつ炭鉱遺産が、近代化遺産に転化した過程を描き出す。その上で、過去と現在における旧産炭地でのアート活動と作品に見られる、国外を含めた旧産炭地という地域ならではのアートの役割を提示する。さらには、國盛氏自身が芸術家として、旧産炭地の記憶と記録を自らの作品やワークショップ等に反映させていく活動を行い、それに対する鑑賞者・批評家・マスコミなどの反応も、本書での分析対象としている。 本書は旧産炭地における、石炭産業・労働運動・地域社会・アート・文化といった側面にかかわる多様なアーカイブの役割、またそのアーカイブが著者自身のものを含めたアート活動に波及する実態を示す点で、極めて独創的な著作と言える。アートのみならず、産業や地域社会といった多方面にわたるドキュメンテーションの重要性および可能性を提示したことを評価し、学会賞を授与する。

◆第 15 回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション推進賞

〔賞の概要〕

アート・ドキュメンテーション関係業務の現場において、効果的かつオリジナリティを発揮した者、あるいは機関を選出。会員に限らない。

受賞	saveMLAK 東日本大震災以降現在まで 10 年間にわたり、災害時における博物館・美術館(M)、図書館(L)、文書館 (A)、公民館 (K)の活動の記録、発信を継続してきた実績に対して
授賞理由	saveMLAK (セーブ・ムラック) は、東日本大震災をきっかけとした博物館(M)、図書館(L)、文書館(A)、公民館(K)の被災・救援に関する情報を集約する活動である。発災直後から、それぞれの館種ごとに立ち上がった被災情報収集の動きを取りまとめる形で 2011 年 4 月に発足した。自主的な参加者がインターネット上の情報を中心に収集し、Wiki を利用して共同でデータを編集するネットワーク型の組織で、2012 年 2 月には施設単位で 21,000 ページ以上のデータを公開した。その後発生した地震や豪雨・台風による被災についても情報が追加されている。2020 年には新型コロナウイルス感染症による図書館への影響の調査を開始した。また、ニュースレターの発行やイベントの開催により、活動の周知と持続を図っている。 施設に対して直接はたらきかける被災支援が多い中で、10 年にわたり情報の集約に徹した結果、MLAK の被災情報を蓄積したインターネット上のアーカイブズとして独自の位置を占めるに至った。「災害の記録」という課題を支援の一環として位置付け、Wiki やオンライン会議の利用といった情報通信技術の活用を含めて、ドキュメンテーションの立場から新たな可能性を提示した先駆的な実践として評価し、推進賞を授与する。

※ 第 16 回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・推進賞の推薦を募集しています。詳しくは、本予稿集巻末および学会のウェブサイトをご覧ください。会員の皆様には、ぜひ多くの推薦をお寄せくださいますようお願い申し上げます。

<http://www.jads.org/award/award.htm>

野上賞は、本学会の前身であるアート・ドキュメンテーション研究会発足の当時から会員であった野上紘子さんのご遺族からの寄付金 200 万円を基に設立されました。野上紘子さんはご生前、美術古書店リプロダールを経営されており、当時の JADS 研究会の整理 WG に熱心に参加されていました。

同賞は本年まで 15 回を数え、計 31 件の活動を顕彰してまいりました。ご寄付の趣旨に沿うよう、今後もアート・ドキュメンテーション分野における顕著な活動の顕彰に努めてまいります。会員の皆様にもご協力をお願い申し上げます。

【秋季研究集会・研究発表】

14:20 - 15:20 (発表25分 質疑5分)

「大阪市立東洋陶磁美術館収蔵品画像オープンデータサイト」の公開 ——デジタル画像のオープンデータ化の意義と今後の展望

“The Museum of Oriental Ceramics, Osaka Open Data” website
-The significance and prospects of open data for digital images

小林 仁*

KOBAYASHI, Hitoshi

Resume:

2021年3月26日に公開された「大阪市立東洋陶磁美術館収蔵品画像オープンデータ」サイトでは、収蔵の国宝・重要文化財を網羅した収蔵品23件の高精細高解像度画像の多言語対応オープンデータ化を実現した。美術館のオープンデータにふさわしい十分な鑑賞に耐える高いクオリティの画像の提供と、収蔵品管理システムやクラウドストレージの連携・活用などにより構築・維持コストを削減した持続可能な運営システムなどを大きな特徴とし、海外の美術館で主流となりつつあるオープンデータ化の水準に対応した、公立美術館のオープンデータサイトの一つのモデルとなるものといえる。

1. はじめに

大阪市立東洋陶磁美術館では、文化庁の「令和2年度地域と共働した博物館創造活動支援事業」として、2021年3月26日より「大阪市立東洋陶磁美術館収蔵品画像オープンデータ」(<https://websites.jmapps.ne.jp/mocoor/>)を公開し、収蔵する国宝・重要文化財を網羅した収蔵品23件の高精細高解像度画像をオープンデータ化した。

2. 特徴と意義

当オープンデータの特徴は大きく次の4点に集約できる。

1) 構築・維持コスト削減による持続可能性

当館で導入している収蔵品管理システムI.B.MUSEUM SaaSと「Web-API公開機能」¹を活用して制作した点が大きな特徴である(図1)。これにより、既存の収蔵品データベースのアーカイブデータとの連携が図れるという利点のみならず、オープンデータサービスの構築・維持のコストを実質ゼロに削減し、持続可能な運営を実現することができた。また、同じく「Web-API公開機能」により構築された、サイトの顔といえるトップページは、画像の美しさと利便性に配慮した当館にふさわしいデザインとした。

2) 多言語化対応

当サイトは日本語、英語、中国語(簡体字・繁

体字)、韓国語の多言語対応とした。国内の美術館では愛知県美術館が2018年に1200件を超えるパブリックドメインの収蔵品画像を公開し、日本の美術館における画像オープンデータ化の先鞭をつけたが、対応言語は現時点で日本語と英語の二ヶ国語となっている²。当館のホームページでは早くに多言語化を進めており、館蔵品の多言語データの蓄積を活用しながら、国内外へ広く館蔵品の魅力を発信するという目的のため多言語対応のオープンデータを実現することができた。

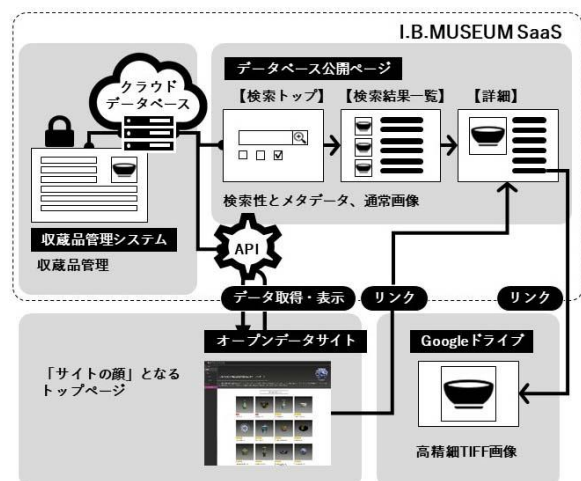


図1 システム概念図

3) 高いクオリティの画像データ

写真家の西川茂氏により新たに撮影された写真は、広波長域の色の再現や豊富な階調表現において極めて優れた機材と独自の面光源照明によ

*こばやし ひとし(大阪市立東洋陶磁美術館)

り撮影され、7段階の露光撮影による7枚のデータは専用ソフトで現像、合成処理された。こうして撮影された画像は、従来の写真や肉眼でとらえきれなかった陶磁器本来の色彩や質感の醍醐味を味わうことを可能とし、画像による作品の鑑賞や研究の新たな可能性を示す画期的なものとなった³。そのため画像の調整には十分な時間と労力をかけ、美術館にふさわしいクオリティの高い画像を追求した。背景を統一のグレーバックで合成しているのも、画像の鑑賞に集中できることを最優先で考えたもので、また切り抜きなどの利活用の利便性にも配慮したものである。それゆえ、今回そうした画像の特徴を最大限引き出すためにも大容量データでの公開が必須と考えた。収蔵品管理システムの画像データの仕様の範囲（1枚あたり約25MB）を超えた1枚あたり100MB程のTIFF画像については、クラウドストレージ（Googleドライブ）を活用することで対応し、同時に実質コストゼロも実現することができた。

4) 幅広い利活用への対応

個人利用や教育研究利用から商業利用までを申請の必要なく利用可能とした（「CC BY」準拠）点も大きな特徴である。当館ではすでに展示室内での撮影の自由化（ストロボや三脚禁止等一定の条件下）を進めてきたが、今回のオープンデータもそうした流れともリンクしており、広報効果や当館館蔵品の知名度、親しみやすさの向上を目的とするとともに、図書・雑誌・新聞等での掲載・利用促進や、さらには新規グッズ商品の開発など様々な効果を期待してのものである。美術品としての鑑賞、学習や研究、さらには商業利用という点でも、大容量データの提供は必要不可欠であり、掲載依頼などで最も需要の多い国宝・重要文化財等指定物件を網羅した23件の画像は、その画像のクオリティも含め、公開対象作品数以上にインパクトのあるものといえる。

国内で収蔵品画像をパブリックドメインとして公開している美術館では、ダウンロードできるのは比較的容量の小さな画像のみで、高精細データについては別途申請が必要となっているケースがほとんどである。当館のオープンデータの対象作品数はまだ少ないものの、オランダのアムステルダム国立美術館や米国のメトロポリタン美術館など海外では主流となりつつある高精細大容量データの提供を、日本でいち早く対応したものとして大きな意義を有している。

3. 今後の展望

サイト公開後、『美術手帖』をはじめネットニュースなどにも紹介され、ブログやSNS上でも話題になった⁴。そして、9月20日には一般社団法人全国美術館会議を「つなぎ役」に、当館の「収蔵品検索」及び「収蔵品画像オープンデータ」は国の分野横断型統合ポータル「ジャパンサーチ」との連携を開始し、利活用の可能性がさらに広がった。本年度も文化庁の支援事業として、引き続き対象作品を拡大していく予定である。また、すでに「収蔵品検索」で公開している写真家の六田知弘氏により撮影された画像も一部オープンデータ化を進めている。

美術館として十分な鑑賞に耐える高いクオリティの作品画像の提供と、収蔵品管理システムとの連携やクラウドストレージの活用などの工夫による構築・維持のコストを削減した持続可能な運営システムは、公立美術館のオープンデータとして一つの新たなモデルとなりうるものである。サイトの開設はあくまで出発点であり、今後対象作品数をさらに増やしていくとともに、3Dデータなど新たなデジタルデータにも対応させながら、リアル・ヴァーチャル双方における利活用を促進し、美術館活動に還元していくことで、その真価はさらに発揮されるものと期待される。

¹ クラウド型収蔵品管理システム I.B.MUSEUM SaaS, http://www.waseda.co.jp/saas_article/newsflash16, (Accessed 2021-09-20) .

² 愛知県美術館, <https://jmapps.ne.jp/apmoa/>, (Accessed 2021-09-20) .

³ 大阪市立東洋陶磁美術館編『天目—中国黒釉の美』中央公論美術出版, 2020 年.

⁴ 例えば、美術関連で著名なブログ「青い日記帳」(<http://bluediary2.jugem.jp/?eid=6202>) では、日本においては「エポックなもの」と評価された (Accessed 2021-09-20) .

画像アノテーションを活用した図像データベースの構築

Building Icon Database using image annotations

永崎研宣*, 津田徹英**, 下田正弘***

Kiyonori Nagasaki, Tetsuei Tsuda, Masahiro Shimoda

Resume:

本発表では、発表者らが取り組んだ大正新脩大藏經図像データベース: SAT 大正蔵図像 DB の開発・公開を通じ、その具体的な内容やそこから得た知見を報告する。

1. はじめに

発表者らは、2016 年 6 月、大正新脩大藏經図像データベース: SAT 大正蔵図像 DB を公開した。本発表は、このデータベース（以下、DB）の構築と、その後のアップデートに関する報告である。

発表者である下田正弘と永崎研宣は、1994 年に始まる SAT 大正蔵テキスト DB の構築・運用の一環として、大正新脩大藏經図像編（12 巻）のデジタル化公開を目指していた。海外の研究者からの希望を複数受けていたこともあり、より効果的な公開方法を目指し、仏教図像研究者との情報交換を行っていた。そのような中で、発表者である東京文化財研究所（当時）の津田徹英の参画により、仏教図像の絵引きとして、図像の名称だけでなく細かな属性も含めた検索が可能なシステムを構築するという方向性が定まった。

2. 初期のデータ構築

構築にあたっては、約 1200 頁のデジタル撮影と、そこに含まれる図像にアノテーションをつけるという 2 つの作業が必要となった。デジタル撮影は 2012 年に専門企業に依頼して実施し、当時としては比較的高画質であった 6000 万画素のカメラで撮影し、大判画像については分割撮影とした。最大では 25 分割したものをつなぎあわせ 15 億画素となったものが 2 件あった。

アノテーションデータの作成作業は、アノテーションの付与の仕方やシステムの設計を検討した後、2015 年度科学研究費補助金の成果公開促進費（データベース）が採択されたことにより、着手が可能となった。作業は全国に散らばる図像研究者達によるコラボレーションに依ることとした。このため、永崎が共同作業環境として Web アノテーションシステムを構築した。システム構

築に際しては、様々な関連システム・ソフトウェア・ライブラリ等を試用・検討し、なかには、すでに海外で広まりつつあった国際的な Web 画像共有のための技術仕様 IIIF (International Image Interoperability Framework) も含まれていたが、技術上の課題が散見されたためにこの時点では採用には至らなかった。当時安定して利用できていた Deep Zoom 形式を用いた Web 画像ビューワ OpenSeadragon を基軸とした仕組みとし、作業者が画像上の任意の図像をドラッグして矩形選択するとポップアップが現れ、そこに表示されたフォームから適切な属性を選択していけば入力ができるものを構築した。作業に際しては認証を行っており、誰がいつ入力したかという情報も自動的に記録された。データの蓄積は広く用いられているフリーの関係 DB ソフトウェア PostgreSQL のテーブルに保存され、取り出しの際には必要に応じて JSON 等のフォーマットに変換されるようにしていた。

3. 公開システムの開発

2015 年度には、津田の指揮により図像編第 1 巻・第 2 巻に登場する仏尊・三昧耶形等に対する 4300 件のアノテーションデータを構築できた。そこで、永崎は、これを踏まえつつ翌年度に公開システムの開発に着手した。このときには、前出の IIIF の技術的な課題が解消されていたことが確認できたため、これを基軸としたシステムを開発することとした。なお、IIIF は、規格として画像上のアノテーションを記述するルールが確立されており、それに対応するフリーソフトウェアとして Mirador2 が当時公開されていた。このため、Web ブラウザ上の絵引 DB 機能のために新たなソフトウェアやシステムを開発する必

*ながさき きよのり （一般財団法人人文情報学研究所・東京大学大学院人文社会系研究科）

** つだ てつえい （青山学院大学）

*** しもだ まさひろ （東京大学大学院人文社会系研究科）

要がなく、単に一定のルール(IIIF が定める JSON 形式)に従ってテキストファイルを作成するだけで済んでしまうため、システム開発の手間が大幅に簡略化されただけでなく、データの可搬性や持続可能性という点でも有用であった。また、Mirador2 は、IIIF の規格としての特徴を活かすべく、複数の画像を並べて表示してそれぞれに拡大・縮小したりアノテーションを表示させたりすることも可能であり(図 1)、利便性や活用可能性を大きく広げることができた。

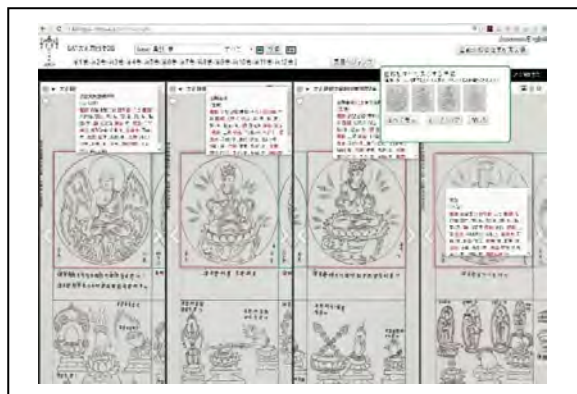


図 1 図像を 4 つ並べてアノテーション表示

なお、Mirador2 の採用にあたり、永崎はインターフェイスの日本語化と、ページめくり方向を右から左にする機能を開発し、いずれも Mirador2 本体にソースコードを提供し、世界中で自由に利用可能となった。

4. 公開システムへの反響

公開したシステムは、属性から仏尊が検索できることから、主に仏教研究者を対象として各地で開催した SAT 大蔵経 DB 利用者セミナーでは好評を博した。しかしながら、12 巻中最初の 2 巻の途中までしかできていなかったことや、資料に含まれる散文の翻刻ができておらず、さらなるデータ構築の要望が多く聞かれた。一方、IIIF を利用した本格的なアノテーションシステムは国内では初めてであり国際的にも極めて稀なものであったため、デジタルアーカイブやデジタル・ヒューマニティーズにおける新規格の活用例として国内外各地で紹介をする機会を得た。また、当時は海外先進国に比較して日本では IIIF の普及度や認知度があまりにも低いと感じたため、このシステムを活用事例として IIIF 自体をデジタル

アーカイブ関連企業やエンジニア、図書館、研究機関、研究者等に紹介するセミナーも各地で頻繁に開催した。IIIF 自体が日本のデジタルアーカイブの事情に適したものであったこともあり、徐々に採用が広がっていき、国立国会図書館デジタルコレクションでも採用されるに至った。

5. データの拡充と公開システムの更新

公開後、2017 年度より科研費成果公開促進費の重点 DB に採択されたため、データ構築システムを改良し、さらにデータの構築を継続した。2021 年 7 月 13 日のアップデートにより、アノテーションの数は 20,786 件となった。

公開システムについては、Mirador2 の開発が終了してアップデートが行われなくなってしまったため、その後ほとんど生じるであろうセキュリティ問題に対応すべく、2020 年秋、新規に開発・公開された Mirador3 に入れ替えを行った。しかしながら、Mirador2 に備わっていたポップアップでのアノテーション機能が削除されていたため、使い勝手がこれまでと大きく異なり、利便性にも疑問符が付くこととなった。このため、フェリックス・スタイル社の協力により、ポップアップアノテーション機能をプラグインとして開発し、これを組み込んだ形で 2021 年 7 月 31 日に公開したのが現在のバージョン 0.3 である。また、このプラグインだけでなくここでプラグインを組み込んだ Mirador3 自体も公開した。

6. まとめ

本 DB は、絵引の DB としては有用ではあるものの目新しいものではなかった。一方、データ形式を国際的なデファクト標準規格に準拠させることのメリットをわかりやすく提示したという点で日本のデジタルアーカイブの発展に寄与したと言えるだろう。

本発表は科研費 JP17HP7001 及び JP19H00516 による研究成果の一部である。

参考文献

SAT 大正蔵図像 DB, <https://dzkims.l.u-tokyo.ac.jp/SATi/images.php>, (Accessed 2021-09-24)

【秋季研究集会・萌芽研究発表】

15:30 - 17:30 （発表10分 コメント5分 質疑5分）

ミュージアムのオンライン活動を考える ——ギャラリートークの配信

Consideration of online activities of museum
— gallery talk video streaming

大坪 逸貴
OTSUBO, Itsuki

Resume:

ミュージアムがオンラインで活動することの可能性を考える。博物館や美術館が情報発信をするにあたり、所蔵資料や学芸員の知見などのリソースをより魅力的に伝えるには、どのようなことに気を付けるべきか。JADS で開催したワークショップの報告を交えて発表する。

1. はじめに

新型コロナウイルスの流行を背景に、ギャラリートークの配信や展示室の 3DVR、自宅で行えるワークなど、ミュージアムがオンラインでの情報発信に取り組む事例が増えている。とりわけ動画とライブ配信については、近年プラットフォームの多様化と規模の拡大、個人のクリエイター向け機材の普及により、誰もが比較的低予算で高品質な発信を行うことができるようになった。そのような変化は、制作会社に委託をせずにミュージアムがコンテンツを自前で作成することを可能にした。オンラインでの活動は本来コロナ禍に限られるものではなく、学芸員やスタッフがオンラインで活動するためのスキルを身につけ、自館のリソースを発信することはこれから一層意義のあることになっていくと考えられる。

2. ワークショップの報告

JADS ではワークショップ「オンラインギャラリートークをしてみよう」を、2021 年 9 月 11 日、10 月 2 日の二回にわたり開催した。趣旨としては、新しく動画制作をはじめるにあたっての心理的ハードルを下げ、身近な機材を使ってまずは手を動かし、成果物を共有してみる場を作ることを目指した。一日目のレクチャーは、スマートフォンで撮影、編集、投稿までを行うミニマムな工程で、YouTube に投稿する 5 分程度の動画を制作することを目標として行った。トークを主にする場合、音声の収録方法や手ぶれを防いで撮影することに特に配慮を要するため、必要な機材について解説した。また、パソコンからライブ配信を行う方法についても機材の組み方について実演を交えて紹介した。レクチャーの後には、アイデアカードによる発想法で企画を考えるワークを参加者で行った。二日目は、参加者の制作したギャラリートーク動画を視聴し、レビューと意見交換を行った。

ワークショップでは参加者から問題提起として、「リアルな展示を補うのではなくオンラインならではの活動ができないか」「スポーツの中継を受容する文化があるように、ミュージアムのライブ配信のあり方について考えたい」などのフィードバックが得られた。

3. 新しいミュージアムのあり方へ

筆者が所属するサイフォン合同会社では、ミュージアムや図書館のオンラインでのあり方を考えるプロジェクト「omniGLAM」を立ち上げ、プラットフォームの開発を目指している。そこでの議論について触れておきたい。

現状では展覧会など既存の制度における活動を主体とし、オンラインの活動はそれを補うものとして位置づけられる。しかし、WEB というメディアに固有の情報伝達やコミュニケーションを考慮し、オンラインの場自体をひとつの活動領域としてみなすことで、ミュージアムそのものを再規定できるのではないだろうか。3DVR のようにこれまでの鑑賞体験を前提とするのではない。例えば、現地に行って展示を見る間だけでなく会期を通して企画をオフラインでもオンラインでも楽しめるしくみや、「展示室で実物を見る」ことが課す制限から自由な作品提示、「静かに鑑賞する」などの暗黙のルールにとらわれない新しい受容のしかたなどが考えられる。また、これまで現地へのアクセスが困難だった人を包摂することも可能になる。現在具体的なサービス像については検討中だが、継続して取り組んでいきたい。

バーチャル展覧会作成ソフトウェア Virtualion の特徴と可能性 —2020 年度の実践事例を通じて

Possibilities of Virtualion, a Virtual Exhibition Creation Software

武澤 里映*, 伊藤 謙**, 五十里 翔吾***

TAKEZAWA Rie, ITO Ken, IKARI Shogo

Resume:

昨今広まるバーチャル展覧会は、その多くが展示の公開に特化し展覧会事業全体での活用には至っていないと思われる。本発表では、発表者らが昨年より開発してきたバーチャル展覧会ソフトウェア Virtualion の実践を通じて、これが実現する新しい展覧会サイクルを提案する。

1. はじめに

コロナウイルスの感染拡大を受け、実際の展示室さながらの臨場感をもったバーチャル展覧会¹が注目を集めている。これまで行われてきた取り組みの多くでは、展示の公開に焦点が置かれてきた。しかし、バーチャル技術は、展示の公開のみならず展覧会事業一般に活用の可能性があると考えられる。

発表者らは、バーチャル展示作成&公開システム Virtualion の開発を通じて、博物館・美術館の新たなあり方を探求してきた。本稿では、事例をもとに、Virtualion を活用した展示企画・公開・保存研究という展覧会サイクルを提案する²。



図1: Virtualion の操作画面

2. バーチャル展示作成&公開システム

Virtualion の特長は、パワーポイントのよう

に簡単な操作でバーチャル展示が作成できる(図1)ことである。発表者らは、昨年度の展覧会で実際に Virtualion を使用して展示企画を行った³。アイデアを簡単に 3D で表現することで、企画を行う博物館側と資料の提供者の方々の間で活発な議論が促進された。また、作成した展示はオンラインで公開することが可能である⁴。

3. Virtualion が可能にする展示サイクル

このような展示作成&公開システムは、保存研究にも活用することができる。過去に行われた展覧会の再現によるアーカイブ化を行うことで、俯瞰的な写真からはわからない一人称的な鑑賞について考察することが可能になる。このように 3D のアーカイブ化をもとに過去の展示を反省しそこから学ぶことで、新たな展示を企画するなどの循環的なエコシステムが創出できると期待している。

3. おわりに

本発表では、Virtualion が可能にする新しい展覧会サイクルを、事例を交え提案した。今後は、Virtualion のさらなる開発に加え、事例を通じてこのサイクルを実践していきたい。

¹ 本稿では、バーチャル展覧会を「展示空間を 3D で再現し、インターネット上などで鑑賞できるようにした展覧会」として定義する。

² cf. Jones Greg and Christal Mark, “The Future of Virtual Museums: On-Line, Immersive, 3D Environments”, *Created Reality Group*, 2002, pp.1-12.

³ 「身体イメージの創造—感染症時代の伝承・医療・アート」展(2022 年 1 月～2 月開催予定)の企画・シミュレーションを 2021 年 3 月から現在にかけて行っている。

⁴ 「CHINA GRAPHY 日本のまなざしに映った中国」展(2020 年 10 月 31 日～2021 年 1 月 30 日、大阪大学総合学術博物館)。

*たけざわ りえ(大阪大学文学研究科博士前期課程 1 年)

**いとう けん(大阪大学総合学術博物館講師)

***いかり しょうご(大阪大学基礎工学研究科博士前期課程 2 年)

最新Web技術による汎用WebGISの開発とオープンソース



目的：専門家ではない人でも、リアル空間にある情報をバーチャル空間に再現する汎用WebGISを開発する。

**手法：①複雑・大規模化する地理空間（フィジカル空間）データの手軽な活用環境の提供
②地理空間データの管理・分析・可視化のための汎用WebGISの実現
③多様な分野に向けたプラグイン開発による機能拡張**

汎用WebGIS「Re:Earth」の特徴

＜実用性＞ノンコードによる情報のマッピング

専門技術なしでも簡単に扱うことができ、独自のWebアプリケーションの公開を可能にする。

＜独自性・新規性＞様々な分野に対応できるプラグインシステム

最先端のWeb技術を用いたプラグインシステムが実装する。それにより、様々な分析や可視化がプラグインで柔軟に対応できる。

＜実用性・新規性＞柔軟なウィジェット配置システム

デジタルアースをベースとして、さらに統計グラフや時系列などの表現を、柔軟なウィジェット配置システムによって実現できる。



Re:EarthのUI

Re:Earthのオープンソース化

2021年7月26日に東京大学大学院渡邊英徳研究室と株式会社Eukaryaと共同で、「Re:Earth」をオープンソース・ソフトウェアとして公開した。今回のオープンソース化によって、本体・プラグインの開発者を含む、世界各国のエンジニアとワールドワイドなOSSコミュニティを形成する計画を進めている。

ステンドグラス・アーカイブの構築と課題

Development and Problems of Stained Glass Digital Archives

平野 理紗子*

HIRANO Risako

Resume:

ステンドグラス研究に効果的なデジタルアーカイブ構築に挑戦している。現状では、参考となるような既存のステンドグラスデータベースは存在しない上、他の工芸品や美術品などと比べて特殊な点が多く、DB 化には課題が多い。しかし、DB 化の活用によって、新たな視点を得られる可能性がある。

1. はじめに：研究内容

日本におけるステンドグラス研究は現状、国内で制作が始まる明治後期～大正浪漫の風潮により需要が高まった大正期・昭和初期の作品に関しては制作者やデザイン面等の研究が進んでいるが、以降の作品についてはあまり言及されることはなく、今日に至る展開について明かされていない¹。その他の研究視点も特定の制作者や工房を軸とした歴史や図案の特徴から制作者を特定するような研究が多く、非常に限定的である。そこで、時代や制作者を限定せず網羅的に資料を収集したリソースアーカイブを構築した。現状登録件数は 2045 件²となり、今まで研究対象とされていなかった作品も含めた比較をすることで先行研究を凌駕する多くの発見が可能となった。

2. ステンドグラス・アーカイブ

ステンドグラス専門のデータベースは現状存在しないため、撮影方法・メタデータなどから考案する必要がある。

2.1 撮影（例：京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報研究センター）

撮影における課題は大きく以下の 3 点である。

- 1) ガラスは透過性が高く、外光に依存すると色味の標準化が難しい。
- 2) 基本的に対象物を動かせないため、アングルの統一化や背面に暗幕をかけて色味を標準化するというようなことが難しい。
- 3) フラッシュをステンドグラスに向けて撮影するとガラスに反射してしまう。

この点については、今回はフラッシュを天井に向け、反射光を利用して撮影した。

2.2 メタデータ

1) 基本項目：作品名・建設年・所在地・制作年・制作地・制作者・等の内、建設年・所在地以外は不明な場合が多い。昭和 50 年代以前は作品名がなく、名称による特定が難しい。また、「制作者」に関しては原案・デザイン・制作（工房）がそれぞれ異なる場合もあり、タグ付けして区別できるようにした。

2) 固有項目

様式（ヨーロッパ式・アメリカ式）、（アール・ヌーヴォー風・アール・デコ風）、絵付けの有無などの図様の他、設置位置（応接室・寝室・階段）、作品箇所（窓・ドア・欄間）などが必要と考えられる。図様については、キーワード型で極力細かく名称を入力しているが、課題が多い。

将来的に、複数人でデータベースの構築を行う際のデータ入力形式の統一化（特にキーワード型で入力している図様の名称等）も重要な課題である。

3. おわりに：展望

上記のような課題が解決され、より多くの件数を登録することで、今までは研究者個人が足を運んで収集できた数を遥かに超える作品数を研究資料として扱うことが可能になり、限定的な視点による研究に偏っていたステンドグラス研究は今後様々な視点による多様な研究が行われていくようになるのではないかと期待している。

¹ 金田美世『日本のステンドグラス黎明期 木内家資料によるデザインと近代建築』中央公論美術出版、2017 年。

² 2021.09.24 時点

高知県立美術館 石元泰博フォトセンターの実践と展望・課題 ——写真プリントの管理について

Managing a photography collection: The activities of the Ishimoto Yasuhiro Photo Center

朝倉 芽生*

ASAKURA, Mei

Resume:

高知県立美術館 石元泰博フォトセンターにおける、3 万点を超える写真プリントの保存管理の現状と今後についてまとめた。

1. はじめに

「石元泰博フォトセンター」は、郷土ゆかりの世界的写真家・石元泰博（1921-2012）より寄贈された作品、資料および著作権を適切に管理し、その価値を高めるため、石元没後の 2013 年に、高知県立美術館学芸課内に設置された。以降、調査研究、展示公開、著作権管理、教育普及等の活動を行っている。コレクションの内訳は、石元による写真作品のオリジナルプリント（以下、写真プリント）約 3 万 5 千点、ネガ・ポジフィルム約 15 万 5 千点の他、旧蔵図書、カメラ機材、美術工芸品、家具、書簡等で、生前から没後に 10 年ほどの歳月をかけて段階的に受け入れた。

2. 写真プリント管理の現状

上記コレクションのうち、写真プリントについては、館所蔵の他の美術作品と同様に、「作品」としてカウントしており、特に優先的に整理が進められてきた。

2.1 物理的な管理

写真プリントは、美術作品と同じ収蔵庫で保管している。ブックマットあるいはポリエチレン製の写真用スリーブに入れた状態で、無酸性の段ボール製保存箱に 10～60 枚程度ずつ収納されており、その総数は約 1000 箱に上る。

2.2 コレクション情報の管理

保存箱単位で作成された管理リストや写真プリントを簡易複写した jpg 画像、同一カット特定用の FileMaker 等、分散して管理してきたコレクション情報を一元化し、より安定した運用を行うため、2019 年度からクラウド型データベースの構築を進めている。概要は下記の通り。

1) 基本構造

保存箱ごとの情報とプリントごとの情報をそれぞれ別立てのテーブルで記録し紐づけることで、物理的な階層構造をデータベースにも反映している。

2) 分類

保存箱は、受け入れ時の現秩序を保ったものと、シリーズや被写体ごと、出品展覧会ごとなどで仕分けされたものが混在しているが、現在は写真プリントの物理的な移動による分類はせず、タグなどを活用しデータ上で分類作業を行うこととしている。

3) 同一カットの特定

ある特定のフィルムコマから焼かれたプリントが複数枚存在するケースが多く、それぞれに制作の経緯や時期、素材技法が様々である。目視による同一カットの特定作業および技法や来歴特定のための調査を進めているが、効率性、正確性に課題が残っている。

4) 作品情報の遡及入力

外部への公開を前提とした一定以上の正確性が担保された作品情報は、過去の出品・貸出リスト等から遡及的に登録することで、内容の充実を目指している。

3. 展望

上述の管理によって、作品情報へのアクセシビリティや、出納作業の効率性が向上しつつあり、データベースの一般公開などの活用も進んでいる。引き続き、より本コレクションの特性に適したデータベース構造の検討や、外部サービスと連携した普及活動への活用などに積極的に取り組んでいきたい。

*あさくら めい（高知県立美術館）

「ダンスの記述」を記録する——土方巽アーカイヴの事例を元に

Introduction of Hijikata Tatsumi Archive - Butoh Notation System and
"Movement Archive"

石本華江*

Kae Ishimoto

Resume: 土方アーカイヴの概要を紹介し、将来における活動のあり方、特に土方が創り出したダンスの記譜法「舞踏譜」を記録・保存した「動きのアーカイヴ」、その整理、公開について検討する。

1. 土方巽アーカイヴの概要

慶應義塾大学アート・センター土方巽アーカイヴ（以下、土方アーカイヴ）は2021年で23年を迎える。「アスベスト館から寄託された資料に、アート・センターで作成された研究資料、国内外の舞踏研究の論文などが加わった、世界有数のダンス資料のコレクション。」¹と森下隆が記述しているように、保存・管理している資料は大規模なものである。写真、動画、音声資料、エフェメラ、舞踏譜スクラップブック及びスクリプトシート、原稿、書簡、エフェメラ、衣裳、舞台美術、書籍、雑誌、新聞記事など、合計16,326件となる（未整理資料含まず）。

2. 土方アーカイヴの担う役割

1) 展示、催事の企画並びに閲覧サービス

9回に及ぶ主催展示や土方の命日に集う催事も10周年を迎え、また24回目となる新入生歓迎行事としての舞踏公演など、企画も数多く行なっている。加えて1998年に開設後、週3日から始まった閲覧サービスは現在週5日へと拡大、順次来訪者数は増加している。舞踏や土方研究の場であるだけでなく、世界各地から舞踏を学びに来た実演家や愛好家が土方について、また広く舞踏について学び、情報を得る場を提供している。もはや会うことすら叶わない土方の資料に直に触

れ、学ぶことができる土方アーカイヴの果たす役割は大きい。

2) 「動きのアーカイヴ」について

舞踏の受容と需要を促し、価値を創造することが、「アーカイヴ」の枠組みを超えた土方アーカイヴの取り組みである。そして、それは舞踏というダンスの「記録」にも通じる。「動きのアーカイヴ」は土方の弟子である小林嵯峨、和栗由紀夫と山本萌の協力により、「舞踏譜」の解明に向けて、舞踏家による実演を記録してゆくプロジェクトである。和栗による舞踏譜の実演と土方巽振付、山本萌主演＜正面の衣裳＞（1976年発表）の山本による実演を映像に残している。ダンスをどう記述するか。そして、その記譜法をいかにアーカイヴするのか。プロジェクトが残した資料を整理・公開することは、大きなミッションである。

3. 「記憶の記録」から、土方に出会う「場」へ

コレクション内の横断的検索の実現や、バイリンガルコンテンツの充実など具体的な作業目標は様々ある。しかし舞踏をドキュメンテーションする意味を探る上でも、プラットフォームとしてのアスベスト館という「場」、土方をめぐる人物やコミュニティといった視座からも再考し、「動的な記録」であるために、今後の土方アーカイヴの公開・発信のあり方を考えてゆきたい²。

¹ 森下隆「土方巽アーカイヴ【寄贈・寄託および預託】」、『ARTLET』no.51（2019年3月），pp.3.

² 【1】刊行物

（1）単行本

森下隆『土方巽 舞踏譜の舞踏——記号の創造、方法の発見』慶應義塾大学アート・センター，2010年。

DVD「土方巽の舞踏譜の舞踏 Hijikata Tatsumi Notational Butoh」慶應義塾大学アート・センター土方巽アーカイヴ監修，DMC機構制作・著作，2007年。

（2）雑誌論文

石本華江「土方巽アーカイヴ——22年の歩み及び今後の展開」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.27（2020年12月），pp.172-182，<http://www.art-c.keio.ac.jp/publication/kuac-annual/kuac-annual-27/>，（Accessed 2021-10-08）。

石本華江「土方巽アーカイヴ 過去展覧会における視座」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.28（2021年8月），pp.128-142。

発表者プロフィール

小林 仁（こばやし ひとし）

大阪市立東洋陶磁美術館・学芸課長代理

国際基督教大学卒業、成城大学大学院文学研究科博士課程前期修了・同博士課程後期単位取得退学。中国政府公費留学生（高級進修生）として北京大学考古系に留学（1994～96）。博士（学術）。1997年から大阪市立東洋陶磁美術館学芸員、2018年から現職。専門は東洋陶磁史、博物館学。著作に『南北朝隋唐陶俑の研究』（思文閣出版 2015）。企画担当した主な展覧会として「台北 國立故宮博物院-北宋汝窯青磁水仙盆」（2016）他多数。小山富士夫記念賞（第2回奨励賞）受賞（2014）。

永崎 研宣（ながさき きよのり）

一般財団法人人文情報学研究所主席研究員・東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター客員研究員・国文学研究資料館客員教授

一般財団法人人文情報学研究所主席研究員。1971年生。筑波大学大学院博士課程哲学・思想研究科単位取得退学。博士（関西大学・文化交渉学）。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所COE研究員、山口県立大学国際文化学部助教授等を経て一般財団法人人文情報学研究所の設立に参画し、現在に至る。専門は仏教学及び人文情報学。主な著作に『日本の文化をデジタル世界に伝える』（樹村房、2019）、共著書に『デジタル学術空間の作り方』（文学通信、2019）、『欧米圏デジタル・ヒューマニティーズの基礎知識』（文学通信、2021）他。日本印度学仏学会賞（2012）、デジタルアーカイブ学会学術賞（2020）等受賞。

津田 徹英（つだ てつえい）

青山学院大学文学部比較芸術学科教授

青山学院大学文学部比較芸術学科教授。1963年生。慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程単位修得満期退学、博士（美学）。神奈川県立金沢文庫学芸員、国立文化財機構東京文

化財研究所文化財情報資料部長を経て2019年より現職。専門は日本彫刻史および密教図像学。著書等に『平安密教彫刻論』『中世の童子形』『中世真宗の美術』ほか。近刊に『近江八幡の歴史』第九巻・地域文化財（共著）。

大坪 逸貴（おおつば いつき）

サイフォン合同会社 アーキビスト、IA

武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業。武蔵野美術大学 美術館・図書館にて所蔵資料の管理及びデジタルアーカイブ化に携わる。2021年よりサイフォン合同会社に入社し、ミュージアム、図書館に関連した業務を担当する。現在社内にてGLAMのオンラインでの活動を考えるプロジェクト「omniGLAM」を立ち上げ、検討を重ねている。これまでの主な成果物は『中村とうようポピュラー音楽コレクション「地球が回る音」』『とうようズ・レガシー』（2019）など。

武澤 里映（たけざわ りえ）

大阪大学文学研究科博士前期課程1年

大阪大学美学研究室にて、アラン・カプローを対象に、芸術とその記録の問題に関し研究を行っている。特に、パフォーマンスやインスタレーション・アートなど、一過性のある芸術作品の保存やアーカイブについて関心がある。専門は戦後アメリカ、日本美術。Virtualionの開発には、主に学芸面でのサポートで携わった。

伊藤 謙（いとう けん）

大阪大学総合学術博物館資料部講師

大阪大学総合学術博物館資料部講師。国際日本文化研究センター客員准教授。ナショナルジオグラフィック協会エクスプローラー。京都大学薬学研究科卒。京都大学博士（薬学）。大阪大学総合学術博物館研究支援推進員、京都薬科大学生薬学分野助教を経て、現職。博物館学を担当。専門は、生薬学、本草学。文化財科学研究、フィールドワークを中心とした鉱物化石研究も手がける。

五十里 翔吾（いかり しょうご）

大学大阪大学基礎工学研究科博士前期課程 2 年

システム創成専攻知能ロボット学研究室に所属し、人と関わるロボットの研究を行う。その傍ら、バーチャル展示作成システムのプログラミングを行っている。学部時代は美術部に所属し、阪大博物館での展示も経験した。

五十里翔吾、武澤里映、伊藤謙、松行輝昌「バーチャル展示シミュレータを利用したデータキュレーション」『教育 PRO』第 51 巻第 4 号(株式会社 ERP 発行)、20・21 頁。

田村 賢哉（たむら けんや）

東京大学大学院学際情報学府文化・人間情報学博士後期課程 3 年/株式会社 Eukarya 代表取締役

専門は地理学。地理学者として「地の理を記述する」という地理学における大命題を模索中。地球をありのままに観察し、言語・非言語を問わず記述したものを地球に生きる全ての人へ、テクノロジーとデザインを駆使して提供していくことを進めている。

平野 理紗子（ひらの りさこ）

立命館大学大学院文学研究科文化情報学専修博士課程前期課程 2 回生

立命館大学文学部国際文化学域文化芸術専攻卒業後、2020 年より現専修に在籍。専門は日本におけるステンドグラス研究。国内での製作が始まる明治後期から平成初期までに日本で制作、あるいは日本に輸入された作品を主な研究対象とし、作品

のデジタル画像を網羅的に収集したデジタルアーカイブを構築・活用した研究を行っている。既に明らかにされている明治後期～昭和初め以降の時代も含めた今日至る国内での展開や欧米の文化であるステンドグラスが日本に流入したことで生じた変化を見出し、日本独自の特徴や文化の一面を読み解くことを試みている。

朝倉 芽生（あさくら めい）

高知県立美術館 学芸員

2018 年より現職。石元泰博フォトセンター担当学芸員として、写真家・石元泰博に関する調査研究、コレクションおよび著作権の管理、展覧会企画、教育普及等を行う。

石本 華江（いしもと かえ）

慶應義塾大学アート・センター土方巽アーカイヴ担当

4 歳よりダンスを開始、02 年より和栗由紀夫＋好善社、03 年より Co.山田うんの活動に参加する。主な客演としてレニ・パッソ、パパ・タラフマラ、富士山アネット、木ノ下歌舞伎の作品。dreamthinkspeak(英)、ユーリ・ン(香港)、Amareya Theatre(ポーランド)、Anikaya Dance Theatre(米)など海外での出演も多い。また土方巽の作舞法「舞踏譜」を現在に伝えるため研究会 POHRC を日英にて 7 カ年に渡り主催し、また自身も講師として香港、バリ、メキシコなど 13 カ国に招聘される。ソロ作品も含め、アジアやヨーロッパを中心に 21 ヶ国で上演を行った。慶應義塾大学文学部非常勤講師、及び慶應義塾大学アート・センター所員。

第 16 回 野上紘子記念

アート・ドキュメンテーション学会賞、同推進賞

推薦のお願い

標記の表彰は、2022 年度に第 16 回目を迎えることとなりました。今回も各賞の推薦を会員のみならずより募集いたします。本賞の発展にご協力くださいますよう、多くのご推薦をお待ちしています。よろしくお願いいたします。

賞の内容

◆野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞

『アート・ドキュメンテーション研究』、『アート・ドキュメンテーション通信』、その他の雑誌に掲載の論文・記事、図書、データベース、展覧会、ウェブサイトのなかから優れたものを選出。会員に限らない。対象となる論文・記事、図書、展覧会は、受賞年の前年度を含む過去 3 年間に発表されたものとする。(今回は 2018 年度～2020 年度のもものが対象となります。)

◆野上紘子記念アート・ドキュメンテーション推進賞

アート・ドキュメンテーション関係業務の現場において、効果的かつオリジナリティを発揮した者あるいは機関を選出。会員に限らない。

推薦要領

つぎの事項について明記し、下記推薦先までお送り下さい。自薦・他薦は問いません。

学会ウェブサイトでは専用の推薦用紙もご用意しています。ダウンロードしてお使い下さい。

- 1) 賞の名称 (学会賞、あるいは推進賞)
- 2) 被推薦者名・機関名
- 3) 推薦理由 **※まずは被推薦者・機関をご紹介いただく、簡単な内容で結構です**
- 4) ご推薦者名 ※JADS 会員に限ります
- 5) ご推薦者の連絡先 ※電話、ファックス、E-MAIL いずれかで結構です
- 6) 推薦資料 ※著書・論文の場合は書誌情報を、インターネット上の資料は URL をお知らせ下さい

推薦・問合せ先／推薦締切日

■推薦フォーム: <https://forms.gle/SYrdxM1Fv3bTL1bE6>



■アート・ドキュメンテーション学会 事務局 宛

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 9F (株) 毎日学術フォーラム内

TEL: 03- 6267- 4550

E-mail: maf-jads@mynavi.jp

※E-mail は、件名を「第 16 回野上賞推薦」として下さい。JADS ウェブサイトから推薦用紙をダウンロードできます。

推薦締切日: 2022 年 2 月 28 日 (月)

受賞者の決定

推薦を受けた候補者の中から、選考委員会が選出します。受賞該当者のない場合もあります。各賞の受賞者には年次大会時に、賞状・トロフィー・副賞を授与します。

本賞は、本学会の前身であるアート・ドキュメンテーション研究会発足の当時から会員であった野上紘子さんのご遺族からの寄付金 200 万円を基に設立されました。野上紘子さんはご生前、美術古書店リプロダールを運営されており、当時の研究会の整理 WG に熱心に参加されていました。

アート・ドキュメンテーション学会賞・同推進賞受賞者一覧

【第 1 回（2007 年度）】

学会賞：島本 澪 氏（京都精華大学）

『美術カタログ論：記録・記憶・言説』（三元社, 2005）の業績に対して

推進賞：美術図書館連絡会（ALC）

美術図書館横断検索の開発と公開に対して

推進賞：村上 正樹 氏（株式会社マイブックサービス）

本学会の組織基盤の形成と美術カタログを含むアートブックの普及に果たした功績に対して

【第 2 回（2008 年度）】

学会賞：加治 幸子 氏（元東京都美術館司書）

『創作版画誌の系譜 総目次及び作品図版 1905-1944 年』（中央公論美術出版, 2008）の業績に対して

推進賞：木村 三郎 氏（日本大学芸術学部）

美術史研究者の立場におけるアート・ドキュメンテーション活動、教育、研究、また近年のオウィディウス

『変身物語』プロジェクトにおける研究統括、デジタル・アーカイブ構築（<http://ovidmeta.jp/>）など一連の業績に対して

推進賞：中島 理壽 氏（美術ドキュメンタリスト・国立新美術館参与）

美術ドキュメンタリストとしての長年にわたるアート・ドキュメンテーション活動、とりわけ書誌・年譜等編纂に関わる一連の業績に対して

【第 3 回（2009 年度）】

学会賞：該当なし

推進賞：恵光院 白 氏

『美術家索引 西洋篇・東洋編』（日外アソシエーツ, 1991-1992）をはじめとする書誌作成、アート・ライブラリアンの草分けの一人として長年にわたる活動の功績に対して

推進賞：早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

80 年間たゆまず演劇関係資料を収集し、時代に沿いながら、あるいは先取りしながら、継続して資料の情報化・サービスを行われてきた功績に対して

【第 4 回（2010 年度）】

学会賞：研谷 紀夫 氏（東京大学大学院情報学環）

『デジタルアーカイブにおける「資料基盤」統合化モデルの研究』（勉誠出版, 2009）の業績に対して

推進賞：川島 良子 氏、椎名 節 氏、光田 由里 氏、相馬 理奈子 氏、大石 一義 氏

『村松画廊：1942-2009』（村松画廊, 2009）の制作に対して

推進賞：金井 杜道 氏（写真家、前京都国立博物館専門職員）

長年にわたる文化財を対象とした学術的資料写真の撮影の業績に対して

【第 5 回（2011 年度）】

学会賞：該当なし

推進賞：財団法人 観世文庫

長年にわたる能楽資料の保存と調査研究に基づく「観世アーカイブ」の公開に対して

推進賞：竺 覚暁 氏（金沢工業大学）

建築史・技術史ライブラリーおよびアーカイブズの重要性に関する社会的提言と実践に対して

【第 6 回（2012 年度）】

学会賞：該当なし

推進賞：笹木 繁男 氏

長年にわたる現代美術家の資料収集と公開活動に際して

【第 7 回（2013 年度）】

学会賞：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館

『東京国立近代美術館 60 年史』の刊行に対して

推進賞：株式会社 東京美術倶楽部

『市井展の全貌一淡交会、珊々会、尚美展から東京会まで（戦前編）』の刊行に対して

【第 8 回 (2014 年度)】

学会賞：岡野 裕行 氏

『文学館出版物内容総覧 ― 図録・目録・紀要・復刻・館報』編集の業績に対して

推進賞：飯野 正仁 氏

美術館、美術専門誌におけるドキュメンテーション活動と『戦時下日本美術年表』の編纂に関わる業績に対して

【第 9 回 (2015 年度)】

学会賞：金子 貴昭 氏

『近世出版の版木研究』(法蔵館, 2013) 及び「版木閲覧システム」に対して

推進賞：松岡 資明 氏

ジャーナリストとして、アーカイブズの意義と重要性について社会の関心を喚起し、
制度の改革に寄与した報道及び著述活動に対して

【第 10 回 (2016 年度)】

学会賞：豊川 斎赫 氏

『丹下健三と KENZO TANGE』および『TANGE BY TANGE 1949-1959／丹下健三が見た丹下健三』での
建築家丹下健三に対する二つの対照的なアプローチに対して

推進賞：リアス・アーク美術館

東日本大震災の被災生活者の観点にたつ調査記録作業とその展示活動に対して

【第 11 回 (2017 年度)】

学会賞：高橋 晴子 氏 ならびに MCD プロジェクト

身装画像データベース<近代日本の身装文化> および

『日本人のすがたと暮らし : 明治・大正・昭和前期の身装』(三元社, 2016) の業績に対して

推進賞：水谷 長志 氏

日本美術資料の国際的情報発信に関する現状把握と基盤整備にむけた業績に対して

【第 12 回 (2018 年度)】

学会賞：京都大学古地震研究会

共同翻刻アプリケーション「みんなで翻刻【地震史料】」のオンライン展開における成果に対して

推進賞：該当なし

【第 13 回 (2019 年度)】

学会賞：石原 香絵 氏

『日本におけるフィルムアーカイブ活動史』(美学出版, 2018 年) の業績に対して

推進賞：国立西洋美術館

『松方コレクション西洋美術全作品』全 2 巻 (国立西洋美術館, 平凡社(発売), 2018-2019 年) の
編集・刊行に対して

【第 14 回 (2020 年度)】

学会賞：宮崎 幹子 氏 (奈良国立博物館)

特別陳列「重要文化財 法隆寺金堂壁画写真ガラス原板 ―文化財写真の軌跡―」開催 (於奈良国立博物館
2019 年 12 月 7 日 - 2020 年 1 月 13 日) および同図録刊行に対して

推進賞：文化財写真技術研究会

30 年にわたり文化財写真の撮影技術と保存・管理・公開方法の向上に寄与してきた実績に対して

【第 15 回 (2021 年度)】

学会賞：國盛 麻衣佳 氏

『炭鉱と美術：旧産炭地における美術活動の変遷』(九州大学出版会, 2020) の刊行に対して

推進賞：saveMLAK

東日本大震災以降現在まで 10 年間にわたり、災害時における博物館・美術館 (M)、図書館 (L)、文書館
(A)、公民館 (K) の活動の記録、発信を継続してきた実績に対して

アート・ドキュメンテーション学会 刊行物販売のお知らせ

2021/10

現在、一部については特別価格にて販売しております（表示は販売価格、送料別途）。

お問合せ、購入のお申し込みは、毎日学術フォーラムまで。

◆刊行物バックナンバー

『アート・ドキュメンテーション研究』 第29号	(2021年5月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第27・28号	(2020年5月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第26号	(2019年5月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第25号	(2018年3月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第24号	(2017年3月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第23号	(2016年3月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第22号	(2015年3月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第21号	(2014年3月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第20号	(2013年3月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第19号	(2012年3月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第18号	(2011年3月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第17号	(2010年3月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第16号	(2009年3月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第15号	(2008年3月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第14号	(2007年3月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第13号	(2006年3月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第12号	(2005年3月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第11号	(2004年3月刊)	定価¥1,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第10号		品切
『アート・ドキュメンテーション研究』 第9号	(2001年7月刊)	定価¥1,250+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第8号	(2000年7月刊)	定価¥1,250+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第7号	(1999年9月刊)	定価¥1,250+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第6号	(1997年8月刊)	定価¥1,250(税込)
『アート・ドキュメンテーション研究』 第5号	(1996年8月刊)	定価¥1,250(税込)
『アート・ドキュメンテーション研究』 第4号	(1995年8月刊)	定価¥1,250(税込)
『アート・ドキュメンテーション研究』 第1～3号		品切
『アート・アーカイヴ：多面体：その現状と未来：記録集』	(2010年9月刊)	品切
『日本のアート・ドキュメンテーション：20年の達成：MLA連携の現状、課題、そして将来：予稿集・資料編』	(2009年12月刊)	品切
『国際シンポジウム：東アジアにおける美術・文化財情報のネットワーク化を考える：報告書』	(2005年1月刊)	定価¥1,000(税込)
『arsの現場とツールの諸相Ⅱ』(ars-WG叢書・2)	(2000年3月刊)	定価¥1,000(税込)
『報告書：シンポジウム：フランスにおける美術情報の普及と専門教育』	(1998年3月刊)	定価¥1,500+税
『美術情報と図書館：報告書』	(1995年3月刊)	定価¥2,500(税込)

◆お問合せ・お申し込み先

株式会社 毎日学術フォーラム

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 9F

Tel : 03-6267-4550 Fax : 03-6267-4555 E-mail: maf-sales@mynavi.jp

お申し込み方法 : <http://maf.mynavi.jp/hanbai/hanbai.html>

■アート・ドキュメンテーション学会とは

アート・ドキュメンテーション学会は、ひろく芸術一般に関する資料を記録・管理・情報化する方法論の研究と、その実践的運用の追究に携わっています。1989年4月に、美術館/博物館、図書館、アーカイヴ、芸術関連機関の新しい連携をめざし、わが国および国際間における文化的感性と芸術関連情報の創発的な協働のために開設されました。

さまざまな出来事や資料を記録・共有する作業は社会生活の根本をなす人間の営みですが、その理念や技術は現代の情報社会で急速に変容し、飛躍的に発展しています。芸術関連のドキュメントの持つ豊かな可能性は、研究・教育機関のみならず、地域のコミュニティや個人的な活動でも開発される局面にあるでしょう。

本学会には、図書館司書、学芸員、アーキビスト、情報科学研究者、美術史・文学史・音楽史・メディア史・文化史・自然史研究者など、約350名の正会員、学生会員、賛助会員が所属しています。従来の美術館/博物館・図書館・公文書館・アーカイヴおよび学会といった機関や職能を超領域的に融合する新しい学術団体として、本学会は、新しい未知な課題に取り組む方々の参加をえて、活動を展開しています。

本学会は、アート・ドキュメンテーション研究会として創設され、1999年に日本学術会議の第18期登録学術研究団体(情報学・芸術学)に加入後、2005年4月に現在の学会名に改称しました。その後、伝統ある英国美術図書館協会(ARLIS/UK & Ireland)の*Art Libraries Journal*(2013, Vol. 38, No. 2)の「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号の刊行に協力するなど、国際的視野にもとづいて現代社会の要請する人文学と情報学との連動を追究しています。

主な定期的活動として、年次大会、秋季研究集会、学会誌『アート・ドキュメンテーション研究』と会員ニュース

誌『アート・ドキュメンテーション通信』刊行ほか、さまざまな研究集会・見学会、グループ活動、国際交流を実行しています。学会内の各委員会・グループはつねに、今日的要請に即したデータベースの構築、アーカイヴ・デザイン、また個別的な応用課題の解決に取り組み、着実な成果をあげています。

■活動内容

- ・研究会、講演会、見学会の開催

- ・地区部会とSIGの活動

現在、関西地区部会があり、自由に参加できます。

また、日常活動の場として、会員の興味に応じてSIG(スペシャル・インタレスト・グループ)を結成することができます。現在、美術館図書室SIG、デジタルアーカイブサロンSIG、学会アーカイブSIGがあり、自由に参加できます。(連絡先：<http://www.jads.org/contact/contact.htm>)

- ・インターネット・ホームページ(日本語版・英語版)の開設による情報提供・交換及びメーリングリストによる会員交流

- ・情報・資料の収集・交換・提供

- ・アート・ドキュメンテーション関係者の交流

- ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』の発行

- ・『アート・ドキュメンテーション関連文献目録』の作成・維持(上記『研究』並びにHPで提供)

- ・『アート・ドキュメンテーション関係機関要覧』の作成・維持(HPで提供)

- ・ドキュメンテーション関係諸機関・組織との幅広い連携

- ・IFLA(国際図書館連盟)の協会会員として、美術図書館分科会の活動への参加・協力

- ・ARLIS/UK等各国の同種組織との連携

- ・国際会議等参加支援のための助成金の支給

その他、この会の活動に必要な事業を行います。

■会員の特典

- ・本学会の行う研究会・講演会・見学会などの活動に優先的に参加できます。
- ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』（年3回）、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』（年1回）の配付を受けられます（賛助会員は各2部送付）。

■年会費〔年度単位〕

会員種別により、以下の会費となります。

- ・正会員 6,000 円（ただし、65 歳以上は4,000 円〔自己申告制〕）
- ・学生会員 4,000 円（大学学部、大学院などに在学中の学生。申込時に在学証明書または学生証のコピーを提出していただきます）
- ・賛助会員（個人または機関・団体）一口以上（一口 30,000 円）
- ・団体購読会員 12,000 円

■ホームページ

- ・活動の詳細については、ホームページをご参照ください。
<http://www.jads.org/>

■入会方法

- ・HP から「入会申込書」をダウンロードし、必要事項をご記入の上、下記の間合せ先に郵送またはメール添付にてお送りください。役員会にて入会を承認された方に、初年次の年会費の振込用紙を送付します。なお、本学会は会費の入金をもって、入会手続の完了とします。

（入会申込書ダウンロード：

<http://www.jads.org/contact/contact.htm>）



Art Libraries Journal (2013, Vol. 38, No. 2)

「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号

お問合せ・お申し込み

アート・ドキュメンテーション学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル 9F（株）毎日学術フォーラム内

Tel : 03-6267-4550 Fax : 03-6267-4555

E-mail : maf-jads@mynavi.jp

2021 年 9 月 30 日現在

JADS

アート・ドキュメンテーション学会

第 14 回秋季研究集会予稿集

発行日: 2021 年 10 月 23 日 (土)

編集: アート・ドキュメンテーション学会 行事・企画委員会

発行: アート・ドキュメンテーション学会

<http://www.jads.org/>